

お忙しくても、約 2 分間で読めます

ハートフル・ワード (心からの言葉)

山内公認会計士事務所

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

ビジネスに大切なものは原理原則である 遠藤 功 (ローランド・ベルガー会長)

1. ビジネスとしてそもそも「常識」とは、なじみにくい世界である。ある時点の仮説でしかない常識にとらわれ、思考停止に陥ることほど危険なことはない。最近、日産が減益に転じ注目を集めているゴーン氏の日産における再建過程は、彼のミシュランやルノーでの成功体験の方程式、つまり彼にとっての「常識」というものを日産の再建に当てはめてきたはずだ。しかし、ここで頓挫してしまったのは、彼の中の常識と状況の変化との間に、ズレが生じたのである。市場はもはや、ゴーン氏の過去の常識では対応できないことが起きている。
2. そこで必要なのは常識ではなく原理原則なのである。原理原則とは、いつでもそこに立ち戻れる原点。そこに戻ればブレない。これが「不変」である。それ以外は「変」で、常識はその「変」に対応するためのもの。当然、変わっていく。原理原則があれば、その都度立ち返って、何が大切か確認しながら目の前の「変」に対応することができる。これがないと、ひたすら世の中の常識、しかも他者が築いた常識を追いかけてしまう。うまくいくわけがない。原理原則という背景がある組織は、そんな常識に振り回されることがない。
3. トヨタには、こうすればうまくいく、こうすると失敗する、というような固定的な常識みたいなものが非常に少ない。ただし原理原則はある。知恵を出して改善すれば、コストは下がるというのは原理原則だ。販売と技術は両輪というのも原理原則だ。それらはつねに「不変」の部分であって、それ以外は競争環境や市場のニーズがどんどん変わるから「常識」というものはないのだ。

(参考:「週刊東洋経済」2007年6月2日号)

ワンポイント経営アドバイス

社長自らゴミ収集車の後をつけ開発

1. 日本フィルム(本社・大分市)が、グリップ付きゴミ袋の開発に乗り出したのは1991年のこと。地元の清掃工場の所長が、ガラス瓶の破片を持って、田北一彦社長のところに訪ねてきた。「燃えるゴミに混入したガラスの破片で作業員がケガをするが、何かとならないだろうか」。そんな相談だった。田北社長は、問題解決の糸口を見つけるため、翌日からゴミ収集車の後をつけて回った。そして約1週間、作業の様子を観察すると、ゴミを回収する時に、職員がゴミ袋を蹴飛ばしていることに気づいた。
2. ひっくり返っているゴミ袋は、結び目が下を向いており、つかむところがない。作業員は袋を蹴飛ばすことで結び目を上に向けた。要するに、持つ部分がなかったわけだ。ゴミ袋の底にひらひら(グリップ)がついた袋を製造している日本フィルムは、売上高は約21億円(2006年9月期)、自治体指定の分別ゴミ袋のトップ級のシェアを誇る。(参考:「日経ビジネス」:2007年6月25日号)

人事・労務について

人手不足が深刻化するのは2012年以降

1. 「2007年問題」という言葉をよく耳にする。「団塊の世代」がいつせいに定年(60歳)を迎えることにより発生する経済への悪影響を「2007年問題」として懸念する向きが多いようだ。しかし、この「2007年問題」は、企業や経済にとって大きな問題とはならない。つまり、ただちに団塊の世代の定年→人手不足→コストの上昇→インフレないし企業の収益の悪化、とはならず、企業の技術力も大幅には低下しない。
2. しかし、2012年以降は事態は一変する。日本の場合、65歳以上になると、かなりの人が労働市場から完全に退出する。すなわち、このときこそ労働力不足が本格化する時期なのであり、企業ごとに技術継承の成否が問われることになる。「2007年問題」とは、5年後に来る深刻な「2012年問題」への呼び鈴にすぎない。(参考:「週刊ダイヤモンド」2007年6月16日号)

古典に学ぶ

目前の事をなせ

「人の事を^な做すは目前に粗脱多く、徒らに來日の事を思量す。たとえば行旅の人のあくせくとして前程を思量するが如し、太だ不可なり。人は須らく先ず^{はなは}当下を料理すべし」

(訳) 物事をなすに当り、目前のことに手落ちが多い。将来のことを思いめぐらせている。旅人が行き先をあれこれ考えるようなもので甚だよろしくない。(参考:佐藤一斎「言志四録」:PHP文庫)